

みちが繋ぐ美しい北海道づくり ～シーニックバイウェイ北海道フォーラム～

シーニックバイウェイ北海道推進協議会事務局
(北海道開発局開発監理部開発調整課・建設部道路計画課)

シーニックバイウェイ北海道推進協議会（会長：高向巖北海道商工会議所連合会会頭、事務局：北海道開発局）では、シーニックバイウェイ北海道制度の本格運用開始にあたり、5月30日、札幌において「シーニックバイウェイ北海道フォーラム」を開催しました。フォーラムでは、基調講演、パネルディスカッションのほか、ルート運営参加活動団体によるセッションや第1回目の認定を受けた3ルートに対する認定証授与も行われました。

基調講演

「全国へ広がるシーニックバイウェイへの期待と可能性」

石田 東生氏 筑波大学大学院教授

みち・まち、そして人

日本古来のことばである「みち」と訓読みする漢字はたくさんあります。大きなみちを表す道、路。人が散策する径。わだちの軌。まち・ち



石田 東生（いしだ はるお）
1951年大阪府生まれ。'74年東京大学土木工学科卒業後、東京工業大学土木工学科助手、筑波大学社会学系講師、フィリピン大学客員教授、筑波大学社会学系助教授を経て、'89年筑波大学社会学系教授、2001～'03年筑波大学第三学群社会学類長。専門分野は都市計画・交通計画。主な著書：環境を考えたクルマ社会（共著）、都市の未来（共著）。

またを意味する衢などです。これらは物理的な空間的な存在であって、多様の機能をもった「みち」を表現しています。さらに、プロセスを表す途、人と人の倫理的な関係や筋道を示す倫など、プロセス、信頼などの新しい道路行政のあり方を示唆することばも含んでいます。このように「みち」には非常に大きな広がりがあり、大切にしたいことばです。

一方、「みち」と「まち」

ということを考えると、「みち」がなければ生活はできませんし、「まち」の骨格は「みち」が形づくっています。そのため「みち」と「まち」を同時に考えることが基本的に重要なのです。そして、その「まち」には人々が生活し、またさまざまな人々が訪れます。

多様な「みち」、心地よい「みち」、いろいろな活動ができる「みち」を、地域の人たちの発意や工夫で、行政と地域住民等が連携し合いながら創りあげていくことが大切であると思います。

全国に広がるシーニックバイウェイ

全国から北海道でのシーニックバイウェイの動きに注目が集まっています。

例えば、九州では「道守九州会議」が「シーニックバイウェイ九州」に取り組んでいます。昨年、世界遺産に熊野古道が登録されたのを契機に、和歌山県でもシンポジウムが開催されます。また、国土交通省道路局でも、日本型シーニックバイウェイということで、道路を単なる輸送路としてだけではなく、道そのものや、街並み、風景を楽しむ空間、休息し新たな体験や発見をする空間、諸活動の舞台となる空間、ボランティア・NPOとの協働を展開する空間として活用していくための検討が進められています。

持続的な活動を進めていくために

「北海道におけるシーニックバイウエイ制度導入モデル検討委員会報告書」（平成17年2月）では、制度を進めていく上での基本方針として、第一に、ルート運営代表者会議の活動やルート運営計画づくりなど、地域住民主体の運営体制づくり。第二に、そうした運営体制を経営的にも持続性のあるものとしていくための、ブランド形成によるコミュニティビジネス創造への取り組み。そして第三に、推進協議会やリソースセンターの活動等による持続的サポートのための仕組みづくりを進めていく必要があるとしています。

これに加え、今後の活動の具体的なポイントとして、第一に、活動の主体となる地域住民、行政、関連する民間企業等それぞれがしたいことを明確にしていくこと。第二に、それぞれができることを拡大していくこと。そして第三に、具体的な実践を通じた議論などを通して、お互いへの期待と合力をコミュニケーションする場を形づくっていくことがあるのではないかと思います。

普請とわっしょい

“普請”^{みちぶしん}というのは、あまねく請うということですが、「未知普請」というのがあります。これは「みち」のいろいろな可能性を知り、地域の道をみんなでよくしようという、地域住民参画型・協働型の「みち」づくりを進めていこうということです。

私はそれに“わっしょい”という言葉をつけ加えたいと思います。御神輿を担ぐとき、あるいは普請を進める時のかけ声です。“和を背負う”と書くようですが、いろいろな人が味を出して、自然に融合して、楽しみながら、さらに高い所をめざす。これがシーニックバイウエイのチャレンジ精神そのものではないかと思っています。

「私のほくほく話」

目加田 頼子氏 NHKアナウンサー

活力ある地域づくりのために

シーニックバイウエイには、“美しい景観づくり”や“活力ある地域づくり”、“魅力ある観光空間づくり”などのねらいがありますが、私が最も重視しているのは“活力ある地域づくり”です。

「地域の魅力とは何なのか？」を考えると、放送で一番こだわりのあったのは、地域に暮らす

人々でした。北海道の最大の魅力は、私は人にあると常々思っています。北海道には、来る者を拒まない、そういう人の温かさ、温かい受入の心というものが、地域に暮らす一人ひとりの皆さんのハートにあるからではないかと思っています。

そして、そうしたものがシーニックバイウエイの活動の際に、とても生きてくるのではないかと気がします。その地域の人たちとどう触れあっているのか、それが一番大きなポイントだと思います。

北海道の魅力について

北海道の魅力のひとつに、私も好きなのですが、“花”があります。特に5、6月にかけて、桜から梅、水仙、ツツジ、バラ、そしてライラックというふ



目加田 頼子（めかたよりこ）
静岡県出身。1983年NHK入局。
「サンデースポーツ」「ナイトワイド」、大阪放送局勤務等を経て2002年4月から札幌放送局で「ほくほくテレビ」を担当。
'05年からはNHKアナウンス室所属、「趣味の園芸」「土曜の夜はケータイ短歌」担当。

うにワッと咲き、7、8月と続いていく。この時の北海道の花の見事さは絶対どこにも負けません。

それにもうひとつ大切なものは、やはり“人”だと思います。北海道で勤務した3年間、番組でいろいろな人に出会いました。本当に数え切れないくらい、いろいろな温かい人たちと触れ

あうことができました。北海道では、そうしたたくさんさんの地元の人が活躍されているのではないのでしょうか。そうした北海道が持っている“人”の資源がシーニックバイウエイ活動の中でも、きっと生きてくるものと思います。

きれいとか便利とかおいしいだけでは、例えば観光客だって、絶対リピーターにはなりません。地元の人たちとの出会い、その人たちとの体験を共有する際に、何を学んでもらい、何をしにまた来たいと思ってもらえるかがリピートに繋がりで、ひいては魅力ある地域づくりにつながっていくのではないかと思います。

シーニックバイウエイへの期待

本当は、北海道にはあまり人に来てほしくない所だと思っています。人に知られたくない北海道、でも知ってほしい北海道というような、何かジレンマもあります。きちんと人と自然が共存しながら、外の人に見ていただくべきところ、大切な自

然として守っていかなくてはならない所をきちんと分けながら、いい形で共存し、いい形の北海道を全国にアピールしていってもらえたらと思います。その活動のひとつがシーニックバイウェイであってほしいと思います。

パネルディスカッション 「競争力のある美しく個性的な北海道の 実現に向けて」

コーディネーター

林 美香子氏 フリーキャスター

パネリスト

我孫子 健一氏 ㈱北海道観光連盟会長
石田 東生氏 筑波大学大学院教授
目加田 頼子氏 NHKアナウンサー
山本 勝栄氏 写真家・女満別町商工観光室長

シーニックバイウェイの魅力

我孫子 シーニックバイウェイでは北海道開発局の事業の集大成ともいえるすばらしい発想、企画



画を実行されていると思っています。発想がだけでなく、手法が優れているという面もあります。

我孫子 健一（あびこけんいち）1931年生まれ。北海道大学卒業。'54年北海道庁入庁、'80年北海道上川支庁長、'83年北海道開発調整部長を歴任し、'87年北海道副知事となる。その後、'91年北海道住宅供給公社理事長、'94年北海道空港㈱代表取締役社長を経て、2000年から㈱北海道観光連盟会長。'02年から北海道空港㈱相談役。

地域の人々が検討して、提案をしてくる、人々との議論が先にあって、その後で行政がそれをサポートするという仕組みになっています。このようなやり方というのは、行政が上から下ろすということではなくて、地域から盛り

上がってくるので、非常に効果があるのではないかと。しかもこの発想は、道路の沿線だけではなく、道路に関連する地域全体をまとめて特徴づけようということですから、まさに地域づくり・まちづくりになっていると思います。

今、一番北海道の観光面で足りないといわれているのは、地域の特徴をどうPRしていくかということです。そういう面でも、この発想というのは、地域から盛り上がった特徴を大いに発信できる仕組みでないかということで、大変期待してい



ます。

石田 シーニックバイウェイを成功させる秘けつは、いいものをいい形でいろいろな人に楽しんでいただくということだと思います。最も基本的な条件としては、やはり地域の資源が非常に優れているということ。そして、その資源をいい形で楽しんでいただける運営計画なり、人のホスピタリティがあるということ。地域資源、自然の問題と人の問題の両輪だと思います。その両輪がそろっていたのが、今回認定された3ルートであったと思います。

身近すぎて分からない地域の良さ

山本 町内で写真展を何回かやりました。展覧会というと、普通は撮影場所を入れますが、それはやりませんでした。なぜかということ、自分も自分のまちのことを知らなかったということで、見に来た人たちが、本当に自分のまちを知っているかどうかを確かめたかったからです。

そうすると、丘の風景を見た人は、開口一番、「ここ、美瑛？富良野？」と言ったわけです。湖の夕



山本 勝栄（やまもとかつえ）女満別町出身。北の写真家集団「DANNP」会員。オホーツクフォトグラファーマンバース事務局長。北海道エンデュロ協議会代表。東オホーツクエリアを中心に活動。2年前に地元でこだわった写真家7人に呼びかけ「オホーツクフォトグラファーマンバース」を組織し、地域に根ざした写真活動を続けている。

日を見たときに、「これ、サロマ湖の夕日？」と。もっとひどいのは、自分の家の横にあるシラカバの防風林の写真を見て、「これ、どこの防風林？」と、自分の家の隣なのに分からなかった。そんな状況でした。まさしく私自身気づかなかったのですが、たまたまカメラを向けたことで自分のまちの良さを発見できたというのがありました。

かえって外から来た人の方が、その地域の良さが分かるかもしれません。現に東オホーツクシーニックバイウェイでは私を含め4人出席していますが、地元育ちは私ひとりだけですから。

林 山本さんはシーニックバイウェイの取り組みについてどうお考えですか。

山本 市町村の財政が厳しい中、やはり住民との協働が必要となりますが、シーニックバイウェイでの活動を通じて、民間のパワーはすごいと感じました。例えば、ルート運営計画づくりにしても、行政の立場だったらこんな短期間にできなかったと思います。

ただし、そこまでいくにはかなり大変でした。というのも、従来の制度に比べて、例えば、地域発案型であるとか、明確な補助金制度があるわけでもなく、特に沿線市町村担当者の理解がなかなか得られなかった。それでも、民間の方々から始まって少しずつ輪が広がって行って、最終的に35の団体の参加をいただいています。

安全快適なツーリング環境づくり

我孫子 普通北海道の魅力というと、自然、食、温泉ですが、シーニックはそれにドライブが入っています。これは新しい発見であると思います。

それから今冬、ニセコにオーストラリアから多くの旅行者が訪れていますが、新千歳空港に到着してから、そのままバスでニセコに直行できることが高く評価されています。

シーニックバイウェイでは、ルート上に観光・景観スポットの整備も検討されているようですが、北海道は交通事故が多く、そうした休憩施設などが整備されると、より安全なドライブ環境が確保され、一層評価が高くなるのではないのでしょうか。

トップランナーとしての自覚と責任を

石田 シーニックバイウェイは北海道で始まり、九州や四国など全国的に広がりつつあります。シーニックバイウェイは北海道のものだけではありません。同じような悩みや苦しみを持った地域



が全国至る所にあって、それぞれが北海道での取り組みに対して興味を持って見えています。そういった意味で、北海道はトップランナーとして走り続ける責任があるわけ

で、そうしたことを自覚する必要があると思います。

多様で効果的な情報発信を

目加田 よく道外の方は北海道の広さを知らないといわれますが、やはり実際に住んでみて初めて、その広さや移動の大変さを実感できると思います。逆に、シーニックバイウェイのように、移動そのものも楽しんでしまおうという感覚、これはもっと道外の人に知ってほしいという気がします。

それと北海道の、いわゆる観光地の情報はたくさん入ってくるのですが、もっときめ細かい情報や移動時間といった情報はなかなか入ってこない。そうした地域の香りのする情報をさまざまなルートを使って発信していくことが大切だと思います。

石田 情報発信という点で参考にしてほしいのがアメリカのシーニックバイウェイのホームページです。いい情報が正しく、使いやすい形で提供されています。それにさまざまなメディアを組み合わせることで提供していくと、より効果的な情報発信ができるかと思っています。

目加田 北海道の自然には神秘的な部分、ぜひ守ってもらいたい部分がある一方、情報をたくさん発信して北海道を訪れる観光客にも親切にしてもらいたい。自然と観光を両立させるような取り組みをしていってもらえればと思います。



林 情報発信や北海道の魅力向上のために、例えば、リソースセンタの準備室とFM北海道で作成したCDでは、景観に美しい音楽やナレーションを組み合わせたものを作成しています。また、航空会社やレンタカー会社と連携して、モデルルートを紹介したり、6月中旬にはシンガポールからチャーター便のツアーも企画されているようです。

シーニックバイウェイ~今後の課題

山本 やはり活動団体と行政がいかにかうまくコミュニケーションをとっていくかが大切な部分であると思います。それぞれの情報をどううまくまとめていくのか、特に、行政がどちらの方向を向いて仕事をしていくかが、今後問われてくるのではないのでしょうか。

また、単に観光客を増やすことではなく、何回も訪れてくれる東オホーツクファンを増やしていきたいと思います。そのためには、パンフレットだけではなく、やはり“人と人の触れ合い”というキーワードは絶対はずせないものと思います。例えば、訪れた観光客に一声かけると、そうしたもののきっかけとなるものと思います。

目加田 自分の隣の風景の写真がわからないというのは、やはりどこかおかしい。もっと足下を見つめ直してもいいのかなと思います。地域やそこに暮らす人々の魅力をもっともっと伝えていく。そしてたくさん触れ合って、体験してもらい、リピーターになってほしいと思います。

石田 シーニックバイウェイが続いていくためには、やはり地域のホストであり、プロデューサーである地域住民の方々が楽しく活動できること。第二に、ファンをつくっていくためには、隅々まで神経を行き渡らせ、高いクオリティをどう維持していくかが非常に重要であると思います。

我孫子 シーニックバイウェイは、国、北海道、市町村、そして活動団体や地域住民の方々が一緒に楽しくやっというとする事業であり、今後の新しい公共事業のひとつの姿を提案していると思います。そして、地域へのさまざまな効果がより発揮されるためには、従来の公共事業の枠にとらわれず、制限の緩和や柔軟な対応を行政に期待したいと思います。

林 私は、このシーニックバイウェイ北海道と



林 美香子 (はやし みかこ)
1976年北海道大学農学部卒業。
'76年札幌テレビ放送(株)にアナウンサーとして入社。'85年からフリーキャスター。公式行事やイベントの司会、テレビ・ラジオの各種番組を担当。食・農業・地域づくりなどのシンポジウムにも参加。著書「ワーキングマザーの元気ブック」「楽々おかずとおやつ」「ハーブティーを飲みながら」。北海道文化財団評議員、北海道景観審議会委員、スローフード&フェアトレード研究会代表、農林水産省「食と農の応援団」メンバー。

いうのはひとつの運動で、それは道路という手段を使った「アイラブ北海道運動」ではないかと、そしてそのファンをもっともっと増やしていきたいと思っています。

また、行政の縦割りということがよく言われていますが、やはり民間の立場でいろいろ活動していますと、例えば「わが村は美しくー北海道運動」というのもありまして、その活動団体とこのシーニックの活動

団体は本当によく重なっています。そういう意味では、「わが村は美しくー北海道運動」や、グリーンツーリズム、あるいはスローフード等、いろいろな活動の団体と一緒に進んできたらもっといいなということを思いました。

セッション

「シーニックバイウェイを語る」

フォーラム開始前の同日午前中には、各ルートの活動団体メンバーや行政機関のメンバー等によるセッションが開催されました。セッションでは、地域における連携やルート運営活動計画づくりや今後の活動における課題等が議論されました。



ルート認定証授与式

フォーラムの冒頭、シーニックバイウェイ北海道推進協議会の高向巖会長から、第1回目の認定を受けた下記3ルートの代表者に認定証が授与されました。

(認定ルート)

- ・支笏洞爺ニセコルート
- ・大雪・富良野ルート
- ・東オホーツクシーニックバイウェイ

